東寺講堂立体曼荼羅の思想的背景

鍵和田聖子

目次

序
第一章　東寺講堂立体曼荼羅についての現在の見解
　第一節　先行研究における見解
　第二節　先行研究への疑義
　第三節　空海当時の三輪身についての再考察
第二章　空海思想における四種曼荼羅と金剛界三十七尊
　第一節　空海思想における四種曼荼羅
　　第一項　『即身成仏義』に説かれる四種曼荼羅
　　第二項　『十住心論』『秘蔵宝鑰』に説かれる四種曼荼羅
　　第三項　諸開題類に説かれる四種曼荼羅
　第二節　空海思想における金剛界三十七尊と金胎両部思想
　　第一項　『十住心論』『秘蔵宝鑰』に説かれる金剛界三十七尊と金胎合一の思想
　　第二項　諸開題類に説かれる金剛界三十七尊
第三章　空海請来経論と空海思想に見える尊格の位置づけ
　第一節　空海請来の経論における菩薩・明王の位置づけ
　　第一項　『守護国界陀羅尼経』に説かれる梵天
　　第二項　不動明王と大日如来の関係性
　第二節　空海思想に見える尊格の位置づけ～東寺講堂立体曼荼羅の尊格を中心に～
第四章　東寺講堂立体曼荼羅の思想的背景～結び～

序

東寺講堂内に安置されている二十一尊の立体曼陀羅は、空海が東寺別当として造営を指揮していた頃に発願され空海自身の設計とされている。当時は西寺と対称的に建築されたため、伽藍自体は密教的なものではない。しかし、五重塔内、講堂内の諸尊については空海の手にゆだねられたため、そこに存分に密教世界を表現したものと考えられる。つまり、東寺においては、この立体曼荼羅に空海の密教思想が凝縮されていると考えられるのである。

東寺講堂の立体曼荼羅は、仁明天皇の御体不予のため天長十年（八三三）に着工されたと考えられる。承和六年（八三九）六月十五日に開眼供養が行われているため同年の完成であろう。なお、空海は承和二年（八三五）に入定しており、その完成は見ていない。①

この諸尊については東密内で伝承的②に『仁王護国般若波羅蜜多経陀羅尼念誦儀軌』（以下『仁王念誦儀軌』）に基づく「仁王経曼陀羅」とされてきた。しかし、仁王教曼荼羅と一致しない尊格も配置され

ており、一概に「仁王経曼陀羅」と結論づけることはできない。また、空海がどの様な教学的思想の下で設計したのかを明確に示す文献がなく、未だ解明されていないため、多くの議論が為されてきた。しかし設計者空海の思想全般と関連させた研究が十分に進んでいるとは言い難い。以上を踏まえ、本論文では空海の思想を中心に東寺講堂立体曼荼羅の思想的背景について、再考を試みることを目的としたい。

第一章　東寺講堂立体曼荼羅についての現在の見解

第一節　先行研究における見解

東寺諸尊の配置に関する文献中、最も古いのが法三宮真寂（八八六―九二七）撰『不灌鈴等記』であり、この配置を空海当時のものと考える研究が多いため、ここに挙げておく。

〔1〕

北

多聞　帝釈　持国

牙業薩　金剛波羅蜜　利法宝　自性輪

仁王経　不空　阿閦
曼荼羅　大日丈六　五智輪
弥陀　宝生

金　降
不動　教令輪
大　軍

広目　梵天　増長

図1

多聞天　帝釈天　持国天

金剛業　金剛波羅蜜　金剛法　金剛薩　金剛宝　菩薩群

不空成就　大日　阿弥陀　阿閦　宝生　如来群

金剛夜叉　不動　大威徳　降三世　軍荼利　明王群

広目天　梵天　増長天

（『大正蔵』七八・六十五頁中―六十六頁中。図1は〔1〕を基にまとめた図。）

さて、ここで代表的な先行研究をまとめておきたい。まず、高田修氏は『不灌鉾等記』を踏まえた上で、『仁王念誦儀軌』に説かれる内容と一致する五大明王、五菩薩中尊の金剛波羅密菩薩、四隅の四天王、東の帝釈天は仁王経法に基づくと言う。また西の梵天は東西の不均衡を補うために、帝釈天と対になる梵天を置いたと説明する。なお、五仏・五菩薩は金剛界法による所が大きく、仁王経法と金剛界法に跨る二元的曼陀羅と解釈する。さらに五仏・五菩薩・五明王の配列については、如来を自性輪身・菩薩を正法輪身・明王を教令輪身とする三輪身説に基づく配置であると説明している。[3] 石田尚豊氏もほぼこの高田説を支持しているが、五仏・五菩薩・五大明王の関係性は不空訳『摂無礙経』が典拠であると強調している。さらに、『摂無礙経』が空海撰『秘蔵記』に多大な影響を与えているため、同経が空海の時代には何らかの形で知られていたのではないかと推測している。[4]

下松徹氏は、東寺講堂の諸尊について特に三輪身を取り上げ、東寺の諸尊に三輪身が配当された経緯を論じている。同氏は設計者である空海の時代に三輪身の典処の一つである『摂無礙経』の請来が確認できないこと、『摂無礙経』の影響を受けている『秘蔵記』の成立が空海以後と考えられることなどから、空海自身には三輪身の思想がなかったとし、三輪身によって立体曼荼羅を列したとする説に疑問を呈する。[5] なお、諸尊の配置に関しては『不灌鉾等記』が最も作成時に近い資料であり、作成後『不灌鉾等記』までの間に講堂内の諸尊の移動を余儀なくされるような記事が見当たらないため、これを高田氏同様成立当時の配置としている。下松氏の見解は精密で、全面的に支持できるが、その論点はいつ頃から立体曼荼羅に三輪身が配当されるようになったのかということであり、空海における立体曼荼羅の思想背景にはほとんど言及しない。

以上によって現在提出されている説を概観できると考えられる。[6]

第二節　先行研究への疑義

前述した先行研究については、同意できる部分も多く、特に仁王経法と金剛界法に跨る二元的曼荼羅という解釈については同意見である。五大明王を五尊一組で説くものが『仁王念誦儀軌』以外になく、五菩薩中尊の金剛波羅蜜菩薩が『仁王念誦儀軌』に説かれる像容と酷似していること。五仏・五菩薩の配列が金剛界曼荼羅に近いこと[7]などを鑑みれば、そのように解釈せざるを得ない。しかし、以下の三点に関しては考察を要するものである。

①高田氏を始め何人かの学者が仏・菩薩・明王の配置を三輪身で説明している。しかし、三輪身説は空海当時未成立と考えるべきである。そこで次節にて再確認を行いたい。

②現在は建立の契機として、歴史的な考察が行われているのみであるが、思想的契機についても合わせて考えるべきではないのか。これについては第二章で言及する。

③梵天については、現在あまり論じられておらず、帝釈天との均

衡を保つためというような理解に止まっている。しかし、梵天の配置に根拠を見出さず、通常帝釈天と対になることのみで説明するのは少々乱暴である。そこで、『守護国界陀羅尼経』（以下『守護経』）との関連を考えた。これについては第三章で詳述する。

第三節　空海当時の三輪身についての再考察

三輪身とは、自性輪身・正法輪身・教令輪身の三種で構成された仏身形態であり、四種法身説と共に、密教の多種多様な仏身を結ぶ、仏身解釈法の一つである。しかし、空海が三輪身に言及しないため、これを立体曼荼羅の典拠と考えるには検討を要する。

三輪身の形成については干潟龍祥氏や向井隆健氏によって詳細な考察が為されている。空海に三輪身思想があったとする場合その典拠とされるのが、不空訳『般若理趣釈』『仁王念誦儀軌』『摂無礙経』、良賁訳の『仁王経疏』、空海撰と伝わる『秘蔵記』である。干潟氏は不空訳『般若理趣釈』『仁王念誦儀軌』『摂無礙経』を参照すれば、現在の三輪身に近い思想を読み取れるとして、三輪身を不空の創作とし、空海当時には成立していたと考える。[8] 対して向井氏は『摂無礙経』に不空には見られない特徴を見出し、同経を純粋な不空訳と考えず、三輪身不空創作説を危険視している。[9] また『摂無礙経』が空海の『御請来目録』、安然（八四一―九一五頃）の『八家秘録』には見られないため、空海以降安然に至っても日本に請来されていなかった可能性が高い。さらに、『秘蔵記』の三輪身を説く文面は『摂無礙経』と酷似しており、その影響を色濃く受けていると考えられる[10]ため『秘蔵記』は『摂無礙経』請来後に編集され、空海に仮託されたものであろうとする。つまり、空海当時の三輪身の典拠にはなり得ないのである。向井氏の論は請来時期の考察が非常に精密で信頼できるため、『秘蔵記』『摂無礙経』については向井氏の説を支持させて頂く。

以上を踏まえた上で、今一度、三輪身の典拠のうち、空海が確実に目にした『御請来目録』掲載の『般若理趣釈』『仁王念誦儀軌』『仁王経疏』について検討してみたい。

まず『般若理趣釈』には、毘盧遮那仏が正法輪と教令輪に転ずることが説かれ、内の一輪は降伏のための威猛の形を示現すると言う。また『仁王念誦儀軌』[11]『仁王経疏』では菩薩は法輪と教令輪の二種輪によって姿を現じ、法輪である五菩薩が教令輪によって威怒の尊格（明王）を作ることが詳細に説かれている。[12] これらによれば、不空による二輪身の思想が窺え、正法輪・教令輪という語が不空のものであることが確認できる。しかし、現在言う所の三輪身思想の完成は見られず、『仁王念誦儀軌』でわずかに明王を教令輪とするのみである。以上より、空海当時三輪身は成立していなかったと考えるべきであり、三輪身に基づいて立体曼荼羅を構成したとは考え難いのである。

第二章　空海思想における四種曼荼羅と金剛界三十七尊

立体曼荼羅は、空海の説く四種曼荼羅中の羯磨曼荼羅[13]に当たる。そこで本章では四種曼荼羅に言及し、立体曼荼羅建立の思想的契機を考え、付随して金胎両部の思想体系や金剛界三十七尊について論じていきたい。

四種曼荼羅の教理は空海自身の創作と考えられるが、その典拠は空海撰『即身成仏義』（以下『即身義』）に語られるように、『大毘盧遮那成仏神変加持経』（以下『大日経』[14]）に説かれる字・印・形像の三種身である。四種曼荼羅に還元すれば、字は法、印は三昧耶、形像は大曼荼羅である。また、『金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経』（以下『真実摂経』）には「四印曼荼羅」が説かれ、大・法・三昧耶・羯磨の四印が登場する[15]。しかし、『真実摂経』中の四印曼荼羅は金剛界九会曼荼羅の九会を四印に配当するもので[16]、空海の四種曼荼羅とは内容が異なり、直接結びつけて理解することは困難である。つまり空海は『大日経』の三種身を基礎に『真実摂経』の四印曼荼羅の名称を用いて四種曼荼羅を創作したと考えられるのだ。そして、『真実摂経』の四印に見られる羯磨印を『大日経』の三種身に付加し、思想的には「仏の威儀事業」図像としては「立体曼荼羅」と意味付けを行った。すなわち「羯磨曼荼羅」は教理的に全く空海の独創であり、四種曼荼羅は空海の金胎合一思想[17]の一形態と言えるのである。

第一節　空海思想における四種曼荼羅

第一項　『即身成仏義』に説かれる四種曼荼羅

空海は諸論中で再三四種曼荼羅を説くが、中でも『即身義』にその教理を具体的に示している。以下はその偈頌の一部である。

> [2]六大無礙（ニシテ）常瑜伽（ナリ）。体　四種曼荼各不レ離（レ）。相
> 三密加持（シテ）速疾顕（ニル）。用　重重帝網（ゴトクナルヲ）名（ヅク）ニ即身（ト）一。無礙諸仏　…以下省略
>
> （『定弘全』第三巻　一八―一九頁）

この文は『即身義』のみならず、七種の『大日経開題』中二種にも掲載され、空海が最も重用した文言の一つである。ここで四種曼荼羅は六大・三密と並んで説かれ、密教教理の三本柱と位置づけられている。六大・四曼・三密は、龍猛撰『釈摩訶衍論』の三大説を根拠に真如の内容を体・相・用の三大になぞらえて考えるもので、空海の創建とされる。また、この三大円融論こそが空海密教の網格を為しているのである[18]。中でも四曼は、真如の本体である六大より生起した現象を分類し、宇宙を曼荼羅として観察するもので、それを図像に帰結させたのが四種の図画としての曼荼羅である。同じく『即身義』には、

> [3]四種曼荼各不離者。大日経説（ニカク）。一切如来有（ニリ）ニ三種ノ秘密身一。謂（ク）字印形像（ナリ）。字者法曼荼羅。印謂（トフハ）種種標幟即（チ）三昧耶曼荼羅（ナリ）。形者

相好具足身即大曼荼羅。此三種身各具二威儀事業一。是名二羯磨曼荼羅一。是名二四種曼荼羅一。…中略…四羯磨曼荼羅即諸仏菩薩等種種威儀事業等。若鑄若捏等亦是。亦名二羯磨智印一。如レ是四種曼荼羅四種智印其数無量。一一量同二虚空一。彼不レ離レ此此不レ離レ彼。猶如二空光無礙不レ逆。故云二四種曼荼羅各不離一

（『定弘全』第三巻　二四―二五頁）

という四種曼荼羅の説明がある。大曼荼羅は存在者の全体像、三昧耶曼荼羅は象徴、法曼荼羅は言語表現、羯磨曼荼羅はそれら一々の活動作用や立体的像であると言う。注目すべきは、四種曼荼羅を「彼不離此此不離彼。」と言っていることである。四種の曼荼羅は別々にあるのではなく、四種全てが同時に存在することに意味を見出しているのである。

第二項『十住心論』『秘蔵宝鑰』に説かれる四種曼荼羅

『即身義』の他に、特に四種曼荼羅思想が表れているのが、諸開題類と『秘密曼荼羅十住心論』（以下『十住心論』）『秘蔵宝鑰』（以下『宝鑰』）であろう。『十住心論』の帰敬序は『即身義』に説かれる、六大、四曼、三密の三大を網格としている。同様に、『宝鑰』の帰敬頌も三密を欠いてはいるものの六大、四曼を説く。以下がその帰敬序の全文である。

［4］『十住心論』帰敬序

帰二命　婀尾羅吽欠
舸遮吒多波襟慧
制体幢光水生貝
日旗華観天鼓渤
捏鑄刻業及威儀
如レ是自他四法身
天珠　渉入二遍二虚空一
奉二天恩詔一述二秘義一
平等顕二証　本四曼
最極大秘法界体
咿汚哩嚧翳等持
五鈷刀蓮軍持等
薩宝法業内外供
能所無碍六丈夫一
法然　輪円　我三密
重重無碍　過二刹塵一
驚二覚　群眠迷二自心一
入我我入荘厳徳一

（『定弘全』第二巻　三―四頁）

［5］『宝鑰』　帰敬序

帰下命　上金剛内外寿
作遷慢如真乗　寂
日幢華眼鼓　勃駄
捏鑄刻業威儀等
我今蒙レ詔撰二十住一
褒レ霧見レ光無盡宝
離言垢過等空　因⑲
制体旗光蓮　仁
金宝法業歌舞　人
丈夫無礙　過中　刹塵上
頓越二三妄一入二心真一
自他受用日弥新

（『定弘全』第三巻　一一五―一一六頁）

この二つの帰敬序は、空海密教全体系の縮図とも言える内容となっ

ている。[20] 中でも、四種曼荼羅それぞれに敬礼している箇所に注目したい。[4]の「舸(キャ)・遮(シャ)・吒(タ)・多(タ)・波(ハ)・埜(ヤ)慧咿(イ)・汚(ウ)・哩(リ)・嚧(ロ)・翳(エイ)等持」、[5]の「作・遷・慢・如・真・乗寂」は共に悉曇における五類声と遍口声の各行初めの一字で、法曼荼羅を代表させている。次に[4]の「制体幢光水生貝　五鈷刀蓮軍持等」[21]と[5]の「制体旗光蓮唄仁」[22]は各々仏の三昧耶形で、三昧耶曼荼羅を指す。さらに[4]の「日旗華観天鼓渤[23]　薩宝法業内外供」と[5]の「日幢華眼鼓勃駄　金宝法業歌舞人」は大曼荼羅を代表させて胎蔵五仏と金剛界三十七尊を表している。[24] 最後に[4]の「捏・鑄・刻・業及威儀」と[5]の「捏・鑄・刻・業威儀等」が羯磨曼荼羅を指している。この二論書は空海教学の集大成と言っても過言ではない。その帰敬序において、大半を四種曼荼羅に割いていることは興味深い。特に羯磨曼荼羅の造形については詳細で、[25] その要素を全て含んでいると言える程である。

さて、そこでもう一つ考慮したいのが東寺の立体曼荼羅を設計したであろう時期である。空海が朝廷より東寺を賜ったのが天長元年(八二三)。淳和天皇の勅命により『十住心論』『宝鑰』を献上したのが淳和五(八二八)年。講堂の立体曼荼羅に着工したのが天長十年(八三三)年。つまり、右の二論書は東寺が下賜されてから立体曼荼羅に着工するまでの中間期に完成しているのだ。仁明天皇の御体不予回復祈願に伴って着手された計画とは言え、天長二年(八二五)に完成した講堂には正式な本尊が無かったはずであり、空海が本尊について全く構想しなかったとは考えにくい。この時期に、羯磨曼荼羅について捏・鑄・刻といった像形を詳述する文章が見られることで、立体的な曼荼羅を創作しようと言う何らかの意図を見出すことは出来ないであろうか。

第三項　諸開題類に説かれる四種曼荼羅

また、空海は開題類でも四種曼荼羅による説明を多様している。まず、『金剛頂経開題』では『金剛頂経』の十八の会座を説いた後、以下のように述べる。

[6]此十八会瑜伽…中略…都成十万頌。具五部四種曼荼羅四印。具三十七尊。…中略…亦具四種曼荼羅四印。互相渉入如帝釈網珠光明交映展転無限。…中略…若修行者善通達此理趣。与本尊三摩地相応即与如上諸尊平等無異。

(『定弘全』第四巻　七二頁―七三頁)

『金剛頂経』には五部・四種曼荼羅・四智印、金剛界三十七尊が備わり、互いに限りなくわたり合っている。修行者がそれを十分に理解すれば、諸尊と同体となることができると説く。つまり、四種曼荼羅は行者が即身成仏に近づくために習得すべき要素なのである。

また、空海は密教経典以外の開題類でも四種曼荼羅に約して説明する場合が多数ある。中でも特に興味深いのが『法華経釈』の以下

の文である。

[7]約四種曼荼羅釈者。妙法蓮華経観世音菩薩普門品者。即是表観自在菩薩四種曼荼羅身也。妙法者又名正法。即法曼荼羅身。蓮華者。…中略…即是三昧耶曼荼羅身。観世音者。…中略…即是大曼荼羅身。普門者。…中略…即是羯磨曼荼羅身。如是四種曼荼羅身各各量遍満虚空法界。常恒無間作大仏事是名自性四種法身即是毘盧遮那仏之異名。

（『定弘全』第四巻　二〇六頁）

右記では「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」という経の品名を四種曼荼羅に約して解説し、四種曼荼羅身と呼んで、それが宇宙世界に遍満し、常恒無間に大仏事を行っていると説く。さらにそれを四種法身とし、この四種法身は大日如来の異名であると言う。要するに、ここでは四種法身を四種曼荼羅身を通して「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」という品名に重ね、これら全てを大日如来に帰結させているのである。すなわち、顕教経典である『法華経』を密教の法身大日如来に帰結させる手段として四種曼荼羅が依用されてるのだ。

ここで注目したいのは、四種曼荼羅が、密教経典の開題においては行者を悟りの世界に導く要素として、顕教経典の開題においては顕教を密教へ組み込んで行く媒体として大きな役割を果たしていると言うことである。さらに『御請来目録』にて、

[8]加以密蔵深玄翰墨難載。更仮図画開示不悟。種種威儀種種印契出自大悲一覩成仏。経疏秘略載之図像。密蔵之要実繋乎茲。伝法受法棄此而誰矣。海会根源斯乃当之也。

（『定弘全』第一巻　三一頁）

つまり「密教の世界は奥深くて言語文字によっては容易に伝えることができない。そこで、仮に図面に描き表して密教の世界を知らない者に開示するのだ。」と語られることを鑑みれば、四種曼荼羅の延長上には真言行者のみならず、顕教さらに一般衆生までもが見通されているのである。四種曼荼羅は密教を知らない者に密教世界を開示し、悟りに導くための重要な役割を担っていたのだ。

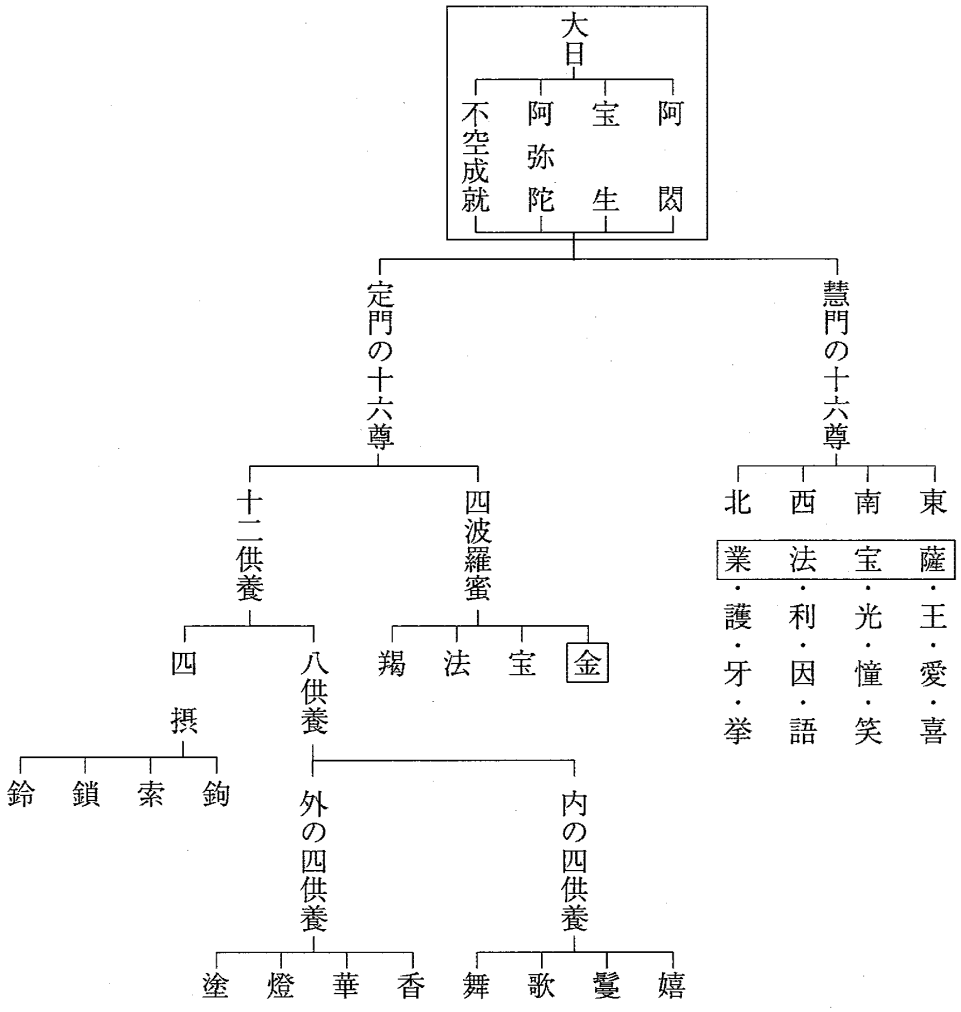
さて、前述したように空海においては「四種曼荼各不離」であり、羯磨曼荼羅こそが空海の創作であった。ここで今一度、『御請来目録』に掲載されている請来曼荼羅を確認してみれば、四種曼荼羅中の大・三・法を確認できるものの、羯磨曼荼羅が確認できない。[26]つまり、空海は早急に密教教理に基づいた羯磨曼荼羅を制作する必要性に迫られていたのだ。この状況下で設計したのが東寺講堂の立体曼荼羅である。ここに一つの大規模な羯磨曼荼羅を建立することで、日本国における空海の四種曼荼羅を完成させたのである。

第二節　空海思想における金剛界三十七尊と金胎両部思想

第一項　『十住心論』『秘蔵宝鑰』に説かれる

金剛界三十七尊と金胎合一の思想

前述した『十住心論』『宝鑰』の帰敬序には両書に跨って、金剛界三十七尊（図2参照）が説かれている。[4]の「薩宝法業」と図2（□内は立体曼荼羅に配置されている諸尊。[27]）



は、金剛薩埵、金剛宝、金剛法、金剛業を指し、いわゆる慧門の十六尊を表す。また、[5]の「金宝法業」は金剛波羅蜜、宝波羅蜜、法波羅蜜、業波羅蜜の四波羅蜜菩薩を指し、定門の十六尊を表す。つまり両書に渡って慧門・定門の尊格を登場させ、金剛界三十七尊中の三十二菩薩を表していると考えられる。

さてここで問題なのは、帰敬序で四種曼荼羅を説く箇所が、なぜ通常通り大・三・法・羯の順に説かれないのかと言うことである。もちろん空海の著書でも、この順通り説かれない場合はある。しかし、それは論法上の理由があって順番が違う場合がほとんどである。ところが、両書の帰敬序には便宜上の理由が何ら見つからない。まして帰敬序は、大書の序であることから、体系を整理し、順序立てて説明する必要があるはずで、適当に並べ替えたとは考え難い。つまり、何らかの意図を以って順序を変えたと考えるべきなのである。すなわち、金剛界三十七尊を説いた直後に羯磨曼荼羅を説くことで、空海が密教的尊格による羯磨曼荼羅を作成する見通しを、暗に示していたとは考えられないであろうか。

また、両帰敬序に見られるのが、曼荼羅を中心に完成された金胎両部の思想である。[4]において法曼荼羅を指す箇所では「舸遮吒多波墜」が金剛界曼荼羅を「咿汚哩嚧翳」が胎蔵曼荼羅を示す。また、大曼荼羅を説く

部分では両論の「日旗華観天鼓渤」と「日幢華眼鼓勃駄」が胎蔵五仏を指し胎蔵曼荼羅を、「薩宝法業内外供」「金宝法業歌舞人」は金剛界の菩薩を表し金剛界曼荼羅を指している。この様に、両帰敬序には金剛界曼荼羅と胎蔵曼荼羅が巧みに組み合わされ、金胎両部に基づく思想が表れている。[28] 従って、当時の空海の根底に金胎合一の思想が流れていたことは、容易に推測がつくのである。

第二項　諸開題類に説かれる金剛界三十七尊

また、『般若経開題』では金剛界三十七尊を以下のように述べる。

[9]今拠二秘密蔵金剛頂等一。金剛般若波羅蜜多者亦是人名。三十七尊中有二四仏母一。所レ謂金剛波羅蜜菩薩。宝波羅蜜菩薩。法波羅蜜菩薩。羯磨波羅蜜菩薩是也。今是経則初尊三摩地法曼荼羅。此四仏母生二成一切仏菩薩一。養二育三世如来一菩薩埵。故下文云。一切諸仏及諸仏阿耨多羅三藐三菩提法皆従二此経一出。此尊亦具二五仏十六三昧四摂八供養等。乃至十仏刹微塵数不可説不可説大三法羯四種曼荼羅。四種法身四種智印等無辺徳一。

（『定弘全』第四巻　二五六―二五七頁）

ここでは、金剛頂系経典を典拠に経題中の金剛般若波羅蜜多が金剛般若波羅蜜菩薩であると説いている。さらに、金剛般若波羅蜜菩薩に代表される四波羅蜜菩薩が仏母であることから、五智如来を始め一切の仏菩薩を生じ、育成する菩薩であると説明している。そのため、経中に「諸法は皆この経典より出ている」とあると言うのだ。また、この金剛般若波羅蜜菩薩には金剛界三十七尊が含まれると言う。これを逆転させて考えれば、諸法は金剛界三十七尊より出ると読み取れる内容である。また、金剛般若波羅蜜菩薩が諸仏諸菩薩を生む源とする思想が読み取れることは興味深い。立体曼荼羅の五菩薩中尊が金剛般若波羅蜜菩薩であるのは、空海がこの尊格を仏の源流と見ていたことに起因するとも考えられる。

このように、空海が尊格を体系付けて語る際に多く用いられる金剛界三十七尊こそが、立体曼荼羅に織り交ぜられている金剛界思想の背景と考えられるのではないであろうか。

第三章　空海請来経論と空海思想に見える尊格の位置づけ

第一節　空海請来の経論における菩薩・明王の位置づけ

第一項　『守護国界陀羅尼経』に説かれる梵天

立体曼荼羅建立の背景に鎮護国家の思想が考えられる。そこで空海が重視した護国経典を、以下に挙げる『遍照発揮性霊集』巻第四「奉為国家請修法表一首」の中に探りたい。

[10]大唐開元已来。一人三公。親授二灌頂一。誦持観念。近安二四海一。遠求二菩提一。…中略…復毎二七日一令下二解念誦僧等一持念修行上。

…中略…仏国風範。亦復如レ是。其所二将来一経法中有二仁王経。守護国界主経。仏母明王経等念誦法門一。仏為二国王一。特説二此経一。催二滅七難一。調二和四時一。護レ国護レ家。安レ己安レ他。此道秘妙典也。

（『定弘全』第八巻　五三頁―五四頁）

これは、空海が高雄山寺での修法を望む旨を朝廷に申し奉った上表文である。唐において、皇帝を筆頭に国家の要人が密教の灌頂を受け、鎮護国家のために陀羅尼を誦持していることを強調し、鎮護国家の陀羅尼経典として『仁王経』、『守護国界陀羅尼経』（以下『守護経』）『仏母大孔雀明王経』を挙げている。三経はいずれも『御請来目録』に掲載され、空海がこれらを護国経典として最も重要視していたことが窺える。『仁王経』は立体曼荼羅の典拠の一つに『仁王経念誦儀軌』が考えられることから、立体曼荼羅と深く関わる経典である。さらに注目したいのは、『守護経』である。『守護経』は空海が梵語などを教授した般若三蔵と牟尼室利三蔵によって翻訳され、空海が請来した。その内容は『大日経』『初会金剛頂経』等との関連が見られ、密教的な護国経典である。[29]

さて『守護経』については、『拾遺雑集』の「請東寺毎年安居講守護国界経表」にも興味深い記述がある。これは、空海が東寺に新しい堂宇を建立したものの、未だ夏安居が行われないことを嘆き、安居での講経を希望した上表文である。文中では、東寺が空海に下賜された際の官符に「東寺は平安京遷都の始め、国家鎮護のために桓武天皇が建立した寺である。その旨を鑑みて真実の教えを宣揚し、国家を鎮護せよ。」とあることを受けて、

[11]今此守護国界主陀羅尼経一部十巻。文括二顕密一。義呑二諸乗一。転禍為福之方。降雨止風之法。具二説此経一。伏望。毎年夏中。永講二此経一。擁二護国家一。

（『定弘全』第八巻　二三八頁）

と東寺の夏安居で『守護経』を講説することを願い出ている。つまり空海は鎮護国家を期待して建立された東寺と、護国経典である『守護経』に密接な関連性を見出していたのだ。

さて、東寺の立体曼荼羅を伝承通り仁王経曼荼羅と理解できない理由として、仁王経曼荼羅に登場しない尊格の存在が挙げられる。特に梵天については、現在ほとんど明確な見解が出ていない。しかし、この『守護経』では梵天が多く登場する上、帝釈天と一組で説かれる場合が非常に多い。例として、序品で如来が座す中金剛座を七千の阿羅漢を始め多くの尊格が慎み敬って囲い巡らす場面の一部をあげる。

[12]而時如来処レ於二衆会一。座二金剛座一。威徳魏魏超二過一切一。如二須弥山出一于大海一。光相炳曜映二奪一切一。譬如二朗日高昇二虚空一。見者清涼如二秋満月一。身心寂静如二大梵王一。衆所二敬畏一如二天帝釈一。

（『大正蔵』一九　五二六頁上）

ここで金剛座に坐す如来の形容として「心身寂静であることは大梵天王のようであり、衆生に敬い畏れられることは帝釈天のようである」という。『守護経』にはこのような形式で梵天と帝釈天が登場する場面が大変多く見受けられるのである。『守護経』と立体曼荼羅の関係については高田氏の論文でも論じられるが、[30] 本論では特に梵天に焦点を絞って考えてみたい。つまり梵天の解釈は、東寺との関係が深い『守護経』に求めるべきではないであろうか。さらに、『守護経』に基づいて行われる「守護法」では本尊に金剛城曼荼羅を用いる。『守護経』中にあるその作成次第[31]を確認すると、壇の中心に大日如来を描き、併せて四波羅蜜菩薩と四仏、四菩薩を描くと有る。すなわち、中尊に金剛界大日如来、内院・第二院に金剛界三十七尊、最外院に帝釈天・梵天を始めとする十天[32]を列す。五大明王以外が立体曼荼羅と類似していることから、全体的にこれを参考にした可能性は高い。

第二項　不動明王と大日如来の関係性

さて前述したように、五仏、五菩薩は金剛界三十七尊によって配置されたと考えることができる。しかし、五明王とその他の尊格の関係性をどう理解すべきであるのか。これについては、『仁王経念誦儀軌』等に説かれる二輪身の思想と共に、『御請来目録』に見られる不動明王関係の書物を参考にすべきと考える。また、『大日経』『大毘盧遮那成仏経疏』（以下『大日経疏』）も考察の対象としたい。なぜこれらの経論が重要であるのかと言えば、不動明王を大日如来の使者として扱っているからである。まず『大日経』では

[13]真言主之下依涅哩底方不動如来使。（『大正蔵』一八　七頁中）

とある。真言主とは大日如来である。大日如来の下、涅哩底つまり西南に住するのが不動如来使者つまり如来の使者たる不動明王である。また、『大日経疏』では

[14]涅哩底方。画不動明王。如来使者。…中略…此尊於大日花台。久已成仏。以三昧耶本誓願故。示現初発大心諸相不備之形。為如来僮僕給使執作諸務。所以持利刃羂索者。承如来忿怒之命。尽欲殺害一切衆生也。

（『大正蔵』三九　六二三頁中）

と、さらに詳細になる。不動明王は如来の使者であり、大日如来の華台にて既に成仏しているのだが、衆生の除障を願い、忿怒の童形という不完全な形を現じて、如来の僕として努めを行う存在だと言うのである。このように、不動明王が如来、特に大日如来の使者もしくは化身というような考え方は、善無畏・一行の時代よりあるのである。

また、空海の請来した不動明王関係の書物にも不動明王を毘盧遮

那仏の使者として説いている。以下にその例として『聖無動尊安鎮家国等法』を挙げる。

[15]而時毘盧遮那如来。為レ愍二念一切有情一。常於二煩悩苦海之中一。流二浪生死一不レ出二三界一。受二衆苦一故。展転造二作無量苦業一相続不レ絶。我為レ抜二済一切有情一。於二三界中一現二威徳光明自在之身一。号曰不動金剛明王。能與レ人天安樂利益。安二鎮家国一無二衰患一。

（『大正蔵』二一　二七頁中）

と、一切の有情が三界を出でることかなわず、生死を流浪し苦しんでいるのを哀れみ憂え、毘盧遮那如来が三界中において威徳光明自在の身を現じたのが不動明王であると説く。このように、空海の時代には『大日経』を筆頭に不動明王を毘盧遮那の使者・化身とする思想が定着していたようである。つまり立体曼荼羅でも、こういった思想に基づいて大日如来の使者・化身としての不動明王を配置したと考えることができるのではないであろうか。

第二節　空海思想に見える尊格の位置づけ

～東寺講堂立体曼荼羅の尊格を中心に～

ここまで、「立体曼荼羅の仏・菩薩・明王の配置は三輪身による」という説に疑問を呈し、その配置は『仁王経念誦儀軌』等の内容と金剛界三十七尊、『大日経』等で不動明王を如来使者と見る思想に由来するのではないかと考えた。さらに本節では、空海の諸著作中で直接的に尊格関係が書き表された部分に注目し、検討したい。(33)

まず、『宝鑰』にて金剛界十六菩薩を説明する箇所がある。そこから読み取れるのは、全ては大日如来より生起するということである。その順番を整理すると、大日如来が四仏を、四仏が四波羅蜜菩薩を、四波羅蜜菩薩がその他全てを生み出すという構造を取っている。立体曼荼羅において、五菩薩の中尊が金剛波羅蜜であるのは、四波羅蜜菩薩から他尊が生じる構造を示していると考えることもできる。さらに、続けて以下のように説く。

[16]四方如来各々摂二四菩薩一。東方阿閦仏摂二四菩薩一。金剛薩埵。金剛王。金剛愛。金剛善哉。為二四菩薩一也。南方宝生仏摂二四菩薩一。金剛宝。金剛光。金剛幢。金剛笑。為二四菩薩一也。西方弥陀仏摂二菩薩一。金剛法。金剛利。金剛因。金剛語。為二四菩薩一也。北方不空成就仏摂二四菩薩一。金剛業。金剛護。金剛牙。金剛拳。為二四菩薩一也。四方仏各四菩薩為二十六大菩薩一也。

（『定弘全』第三巻　一七〇頁）

四方の如来はそれぞれ四つの菩薩を取り込み収めると言う。そして、四仏に各々四菩薩があるので、全部で十六大菩薩となる。空海において、如来がそれぞれ菩薩を取り込み収める、という思想があったことが理解できる。なお、東寺講堂の立体曼荼羅においては、上記

に説明された各々の四菩薩中、最初にあげられた金剛薩埵、金剛宝、金剛法、金剛業が五菩薩群の四方に配置されており、その中尊は如来より出生する四波羅蜜菩薩中の金剛波羅蜜である。これは仏菩薩の関係を非常に直接的に、詳しく著した箇所である。前述したように、空海が立体曼荼羅の設計に当たっていたと考えられる時期に非常に近い頃の著作である『宝鑰』にこのような思想が述べられていることは、金剛界三十七尊が立体曼荼羅の思想の根底に流れていたということへの一つの裏付けとなるように考えられる。

さらに、空海は著作中で教令輪という言葉を使う箇所がある。

[17]『大日経開題』（衆生狂迷）

帰二命（シ奉ル）大悲大日尊（ノ）（ト）　八葉蓮台（ノ）諸如来（ト）
十三大院（ノ）諸聖衆（ト）　教令輪者（ノ）不動尊
両部界会塵刹衆（ノ）（ト）　…以下省略　（『定弘全』第四巻一六頁）

不動尊というのは言うまでもなく不動明王である。空海が不動明王を如来の教令輪として理解していたことがわかる。また興味深いのは、『大日経』の開題において「教令輪」と使用することである。「教令輪」という語句は不空訳経論に見られることから、『金剛頂経』系より発生した語句であると言える。しかし、『大日経開題』であることを考えると、内容的には『大日経』に説かれる、不動明王は「如来使者（ナリ）」という思想を受けていると考えられる。つまりここでも、空海の金胎合一の思想を見て取れるのである。

空海が現在言うところの三輪身によって講堂の立体曼荼羅を形成したとはもちろん言い難い。しかし、金胎両思想に基づき、如来と菩薩・如来と明王・菩薩と明王それぞれに関係性は見出しており、三輪身と言うよりは、このような尊格同士の個別の関係性によって曼荼羅を構成したと考えるべきではないであろうか。

第四章　東寺講堂立体曼荼羅の思想的背景～結び～

本論では、東寺の立体曼荼羅を取り巻く思想背景について空海を中心に幅広く見てきた。ひとまず、先行研究を受けて以下の三点を確認したい。①仁王経曼荼羅であるとする伝承については、その要素を五明王や五菩薩に見ることができる。しかし、仁王経曼荼羅に登場しない尊格の説明ができないことから、純粋な仁王経曼荼羅であるとは考え難い。②金剛界思想が典拠となっているという説については、五智如来・五菩薩は金剛界三十七尊による要素が多く見受けられるため典拠の一つであると言える。③三輪身説に基づいているという説については、空海当時の三輪身について考察した結果、三輪身に基づいて設計したとするのは危険であると考えられるため、否定すべきである。

さらに本論では、新たな要素を付け加えることができたのではないであろうか。まず、立体曼荼羅建立の思想的契機についてである。歴史的には天皇御体不予のためとされているが、思想的には四種曼

茶羅思想を考えることができる。空海は四種曼荼羅を習得してこそ悟りにたどり着けると考えた。そのためには日本国内に四種の曼荼羅を揃える必要があった。しかし、羯磨曼荼羅を請来していないことから、東寺下賜を契機に大規模な羯磨曼荼羅実現を試みたのである。そしてその際に背景とした思想が、当時強く期待されていた護国思想と、空海自身が真言密教を宣揚するのに必要であった密教思想である。

そこで、空海は鎮護国家の経典として『仁王経』『守護経』を選び、『仁王経念誦儀軌』を基に五大明王と四天王を配置することで『仁王経』の、梵天・帝釈天によって『守護経』の要素を取り入れたのだ。さらに『金剛頂経』系思想を参考に金剛界三十七尊に基づいて五仏・五菩薩を配置。また、如来と明王の関連付けにはその背景に『大日経』の思想をも含んでいると考えられる。『十住心論』や『宝鑰』にもあった金胎合一思想を考えれば、この立体曼荼羅においても両部の密教思想を統合した可能性は大いに考えられる。さらに多くの場合、三輪身で説明されてきた如来・菩薩・明王の関係については、空海請来の経論や空海の著作より、三輪身ではなく、それぞれ個別の関係を確認することができた。

以上により、東寺の立体曼荼羅は、護国経典としての『仁王経』『守護経』を念頭に、それらに基づく仁王経曼荼羅や金剛城曼荼羅を参照し、『金剛頂経』『大日経』を中心とした密教思想を巧妙に融合させて構成した曼荼羅と考えられるのである。それは、当時、密教に期待されていた「鎮護国家」という作用と空海が宣揚しようと試みた密教思想を巧みに統合し、両者の願意を実現させた、他に例を見ない至妙の極みと言える。

註

① 足立康「東寺講堂とその真言仏像」『日本彫刻史の研究』・龍吟社・一九四四年、中野玄三『日本の美術・五大明王』至文堂・一九八六年参照。

② この伝承に関しては、『不灌鈴等記』にも既に萌芽が見られ、亮禅（一二五八～一三四一）『白宝口抄』（『大正図像』六 二〇二頁）の頃より、伝承されているようである。（小野玄妙「東寺講堂の諸像に就いて」『東寺の研究』洛東社 昭和九年参照。）

③ 高田修「東寺講堂の諸尊とその密教的意義」『美術研究』二五三号・便利堂・一九六八年 三六―七九頁参照。

④ 石田尚豊『曼荼羅の研究』東京美術・一九七五年・二五〇―二五一頁、『両界曼荼羅の智慧』東京美術・一九七九年・一五六―一五八頁参照。

⑤ 下松 徹「東寺講堂の諸尊と三輪身説」『密教文化』一五七・一九八七年・五九―六〇頁参照。

⑥ 他に佐和隆研「東寺の歴史と美術」『密教大系』四・日本密教一・一九六六年。清水善三「東寺講堂所尊における教義とその表現について」『美術史』五四号。有賀祥隆「空海の修法と造像活動」『全集日本の古寺』第七巻。蓮実重康「弘仁貞観の美術（東寺の講堂の彫刻を中心として）」『仏教芸術』四七号。源豊宗「密教美術史上の東寺講堂」『仏教美術』一七号。佐和隆研『日本の密教美術』。西川新次「東寺講堂の諸仏」『国華』七八二―三などが詳しい。

⑦ 高田修氏前掲論文九頁。

⑧ 干潟龍祥「四種法身と三輪身の総説者について」『密教大系』1

インド・チベット密教二六一―二六九頁参照。

⑨ 向井隆健「三輪身について」『豊山教学大会紀要』一一号・一九八三年・一一―二一頁参照。

⑩『摂無礙経』「以五智忿努相配。五智不動尊毘盧遮那忿努。自性輪般若菩薩降三世尊阿閦仏忿努。自性輪金剛薩埵菩薩軍荼利宝生仏忿努。自性輪金剛蔵王菩薩六足尊無量寿仏忿努。…以下省略」(『大正蔵』二〇 一三〇頁上)

『秘蔵記』「以五忿努相宛五智。不動尊毘盧遮那忿努。自性輪般若菩薩降三世阿閦仏忿努。自性輪金剛薩埵菩薩軍荼利宝生仏忿努。自性輪金剛蔵王菩薩六足尊無量寿仏忿努。…以下省略」(『定弘全』第五巻一五九頁)

⑪『摂無礙経』「以五智忿努相配。五智不動尊毘盧遮那忿努。自性輪般若菩薩降三世尊阿閦仏忿努。自性輪金剛薩埵菩薩軍荼利宝生仏忿努。自性輪金剛蔵王菩薩六足尊無量寿仏忿努。…以下省略」(『大正蔵』二〇 一三〇頁上)

『秘蔵記』「以五忿努相宛五智。不動尊毘盧遮那忿努。自性輪般若菩薩降三世阿閦仏忿努。自性輪金剛薩埵菩薩軍荼利宝生仏忿努。自性輪金剛蔵王菩薩六足尊無量寿仏忿努。…以下省略」(『定弘全』第五巻一五九頁)

⑫『般若理趣釈』「毘盧遮那佛転輪。輪有四種。所謂金剛輪宝輪法輪羯磨輪。其四輪皆摂在二輪中所謂正法輪教令輪。…〈中略〉…即於須弥頂示現威猛忿怒形。降伏魔醯首羅等憍佚我慢妄自恃具一切智。云々。」(『大正蔵』一九 六一一頁 中)『仁王念誦儀軌』『仁王経疏』冒頭より「第一明五菩薩現威徳」として、「第一東方金剛手菩薩」より始まる。「経東方金剛手菩薩摩訶薩。手持金剛杵放青色光。與四倶胝菩薩往護其国。解曰金剛手者。依三蔵所持梵本金剛頂瑜伽経云。堅固利用具二義也。依彼経者。是五菩薩依二種輪現身有異。一者法輪。現真実身。所修行願報得身故。二者教令輪。示威怒身。由起大悲現威猛故。此金剛手即普賢菩薩也。手持金剛杵者。表起正智猶如金剛。能断我法微細障故。依教令輪現作威怒降三世金剛。・・・以下南方、西方、北方と続く。」(『大正蔵』一九・五一四頁上)

⑬ ここで一つ問題となるのは、立体曼荼羅を羯磨曼荼羅と定義する所以である。これについては詳しい論を要するところであるが、ここでは一旦空海が「仏像の類を羯磨曼荼羅としていること」「曼荼羅は一尊のみでは成立せず、曼荼羅と呼ばれるものには必ず複数尊描かれること」の二点により、立体曼荼羅を羯磨曼荼羅と定義したい。

⑭『大日経』「仏言祕密主。諸尊有三種身。所謂字印形像。」(『大正蔵』巻十八 四十四頁)

⑮『真実摂経』『大正蔵』巻十八 三六八頁参照。

⑯ 松長有慶「金剛界の微細会と供養会について」『密教文化』一六二号・一九八八年参照。

⑰ 通常金胎不二と言われるが空海がこの言葉を使わないため、この度は金胎合一とした。

⑱ 高神覚昇『密教概論』第一書房・一九四二年・六二―六三参照。

⑲「金剛内外寿 離言垢過等空因」とは、阿縛羅訶佉(アバラカキャ)で表される地水火風空の五大を表す。

⑳ 宮坂宥勝『宮坂宥勝著作集』第五巻―空海密教―・法蔵館・一九九八年・九七頁参照。

㉑ 制体とは仏塔を表し、大日如来の三昧耶形である。幢は幡矛で宝幢、光は光明で開敷華王、蓮は蓮華で阿弥陀、貝は法螺で天鼓雷音を表す。また五鈷は普賢、刀は文殊、蓮は観音、軍持は弥勒の三昧耶形。

㉒ 制体が仏塔で大日如来を、旗は幡矛で宝幢、光は光明で開敷華王、蓮は蓮華で阿弥陀、唄は法螺で天鼓雷音を表す。

㉓「日旗華観天鼓」のうち日は大日如来、旗は宝幢如来、華は阿弥陀如来、天鼓は天鼓雷音を指しており胎蔵の五如来である。『宝鑰』についてもこれに同じである。

㉔ 内外供と歌舞は金剛界三十七尊中の八供養菩薩を指す。

㉕ 「捏」は塑像、乾漆像の類。「鋳」は金属像。「刻」は彫刻。「業」は事業。「威儀」は諸尊の姿を指している。

㉖ もちろん、目録には掲載していない小規模の厨子のような立体曼荼羅を持ち込んでいた可能性はあるが、他の三種のような大規模な物は確実に存在していなかったであろう。

㉗ 宮坂宥勝『宮坂宥勝著作集』第五巻―空海密教―・法蔵館・一九九八年・一〇五頁参照。

㉘ 宮坂宥勝『宮坂宥勝著作集』第五巻―空海密教―・法蔵館・一九九八年・九六―一一九頁参照。

㉙ 栂尾祥雲「密教経典と護国思想」『密教研究』七四・一九七〇年・密教の護国思想　一四頁参照。

㉚ 高田修氏前掲論文三二―三四頁。

㉛ 「於壇中心画毘盧遮那如来之像。并画四波羅蜜菩薩四方四仏各四菩薩。或安種子。一一菩薩各有一拘胝那由他菩薩。以為眷属。次安十二供養菩薩。最外一院安置十天。」（『大正蔵』一九　五六六頁下）

㉜ 其の他「閻魔天、水天、毘沙門天、伊舎那、火天、羅刹天、風天、地天」。

㉝ 数々の先行研究があるとは言え、空海思想の考察は十分とは言えない。高田氏や、石田氏などに、『秘蔵記』を空海と関係の深い書物として、空海の説とするような考察は見られるが、『秘蔵記』は空海の著作と断定し得ないため、この視点は危険である。